

(七) 東福院 (福山市神辺町湯野)

東福院は山号を湯野山と称する高野山真言宗の寺院である。古代には門前を山陽道がとおり、国分寺・国分尼寺など建立されるなど、この一帯の行政の中心地として栄えた地域である。



詩碑 閑行

一 東福院の縁起 福山市神辺歴史民俗資料館ホームページ 神辺の寺院より

寺伝によると天平六(七四四)年の草創で、当時は現在より北側の丘陵地上部の「二本松」と呼ばれる地に建立され、「松岡寺(しょうこうじ)」と称されました。この地は別名「古寺(ふるでら)」とも呼ばれ、近年まで二本の松が生えていたそうです。

延応元(一二三九)年に戦火に遭い焼失し、その後現在の場所に移され、さらにその後の元禄年間(一六八八〜一七〇三)に「東福院」と改称したと伝わっています。

「水野記」によると、大内・山名の両氏、さらに毛利氏の家臣・天野氏の庇護(ひご)を受け寺領五十貫を寄進されますが後に没収されたことが記されています。また、菅茶山編纂の「福山志料」には「大内より杉原までは領十貫ありし」と記されています。さらに正徳年間(一七一一〜一七一六年)に再び罹災し焼失してしまいましたが、当時の住職・映朝の独力によって再建されたといわれています。

山号の「湯野山」は、当時この地には温泉が湧いていて、その靈驗(れいげん)があることから号したといわれています。また、本堂には聖徳太子作との伝承がある薬師如来の立像がおさめられ、さらに明治初期の神仏分離の際には、山王山(さんのうさん)の「日枝神社」にあった像三体が、仏体の形をしていることからここに移され、おさめられました

福山志料」には

湯野山松岡寺眞言宗明王院末寺本尊ハムカシ此村湯迫ト云所ニ温泉出シ時ノ湯薬師ノヨシイヒ傳フ大内ヨリ杉原マテハ領十貫アリシト云

二 茶山と東福院

閑行

(一)

黄葉夕陽村舎詩 遺稿 卷六

經丘渡水惜春闌
每見櫻花輒就看
東院一株方爛熳
南池三樹半摧殘

丘を経て水を渡り 春の闌(たけ)る惜(お)しみ
毎(つね)に桜花(おうか)を見て輒(すなわ)ち就(つ)いて見る
東院の一株 方(まさ)に爛熳
南池の三樹(さんじゆ) 半ば摧殘(さいざん)す

闌 盛りの時期や状態。 輒 すなわち。 就 身を寄せる。
東院 東福院。 摧殘 くだきそこれる。

(大意) 丘を越え川を渡り、春の盛りを惜しんで、桜の花を見るたびに、何でもそばまで行って見なければ気がすまない性分なので春は全く忙しい。東福院の一株はまさに花の真っ盛り。南池の三本の桜はもう半分ちりかかっている。

*本堂前の石碑の起句「經丘」は「經邱」となっている。

閑行 二 黄葉夕陽村舎詩 遺稿 卷六

獨對櫻花把酒觴 独り桜花に対(む)かい 酒觴(しゅしょう)を把(と)る
不知春日日増長 知らず 春日の日の長きを増すを
嵐消白晝庭凝影 嵐消の白昼 庭影を凝(こ)らす
露濕黄昏徑送香 露湿って 黄昏(こうこん) 徑に香を送る

酒觴 さかずき。 嵐 山に立ち込める青々とした空気。 凝る とどまる。

(情景) 南池では花見ができなかったので、足を延ばしやってきた東福院でお花見。一杯やりながら春の日を過ごしていると、冬に比べて陽が長くなっており、いつの間にか陽が傾いて黄昏が暖かな日差しが匂うように降り注いでいる

*「閑行一」はよく知られているが、「閑行二」があることを知るひとは多くない。茶山は、桜を愛でながらのんびりした時間を過ごしたのであろう。

【ちよつと休憩】 閑行(一)の南池はどこにある

東福院の南方には田畑と高屋川が流れているだけで、池らしいものはない。東福院南方にある池は埴谷地区の「平田池」だけである。菅茶山は福山志料の中で、「平田池。南ト云所ニアリ。周二町三十四間半」と記している。下の写真は平田池で、古城八幡宮の南麓に「南」と呼ばれる地区があり、この池は「南」の地域にあるので「南池」と呼ばれ親しまれてきた。

曾ては、堤防には桜が植えられており、四〇年くらい前まで桜の大木が見事な花を咲かせていたことを記憶している。しかし、国道三三三号線を通すため、池の北側の一部が削られ堤も改修されたので当時の面影はない。



南池 (平田池)

九日登松岡分得日字 黄葉夕陽村舎詩 前編 卷八

青尊會客升加七 九日松岡(しょうこう)に登り 分ちて日の字を得る
青尊 客と会し 升(にじゅう)に加えること七
紫菊逢辰旬少一 紫菊 辰に逢いて 旬(じゅん)に一つ少(かけ)る
萍聚難常醉莫辭 萍聚(へいしゅう)常(つね)にしがたく 酔って辞すること莫れ
來年幾處過今日 來年 幾所で今日を過ごさん

青尊 若い塾生や仲間 辰 時を表す、早朝 旬 十日ごとのことでは十日萍 うき草。聚 寄り合う。 萍聚 ここでは詩を作る仲間

*この詩は文化六年(一八〇九)の作。茶山の日記に「文化六年九月九日 登高於山王山同

者凡塾生二十一・二十七名」とある。この時河相君推や弟子達も同行してにぎやかに登高している。（東福院の裏山が山王山である）

このように、茶山は九月九日の重陽の節句に、近くの山に登り菊酒を飲み、詩を詠んでいる。茶山詩に詠まれている山は「皜皜山 茶白山 山王山 御領山 茶白山」などである。

参考文献

- | | |
|-------------|--------------------|
| 福山志料 上・下 | 芸備郷土誌刊行会 |
| 神辺の寺院 | 福山市神辺歴史民族資料館ホームページ |
| 菅茶山 上・下 | 富士川英郎 |
| 菅茶山略年表 | 菅茶山記念館 |
| 菅茶山とゆかりの人々 | 菅茶山記念館 |
| 黄葉夕陽村舎詩 復刻版 | 児島書店 |